

師範學校編輯  
小學讀本

二

T1A1  
10  
(TA84)

師範學校編纂

# 小學讀本卷三

明治七年  
月改正

文部省刊行

小學讀本卷之三

田中義廉 編輯

那珂通高 校正

## 第一

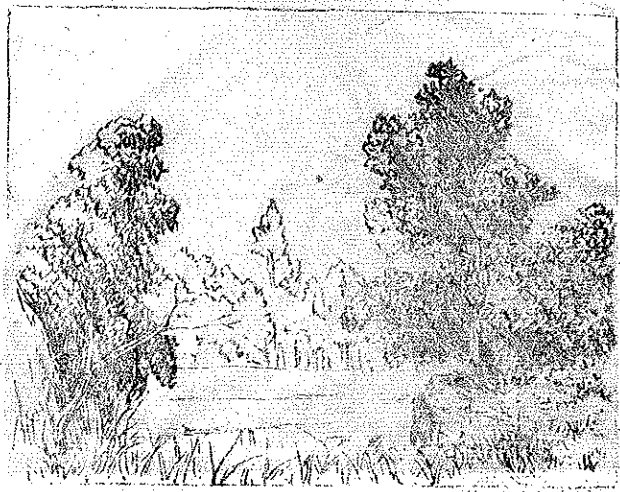
水は動物植物の養液として地球上、尤要用のもの  
のあり、水をまきとき、萬物生育することを得、  
水は止水、流水の別あり、池水、湖水を止水といひ、  
河水を流水といふ、  
湖水は、陸地全く四面を環り、中窪なる地、  
に、  
溜れ

河水とハ山間の谿谷より湧き出で、海へ注ぐをいふ。

此圖ハ林中の湖なり、此水ハ陸地全く四面を圍みたるゆゑ又流れ去ることをな

し、今ハ夏日より又冬日なりや、木葉の茂りたるを以て夏日なることを知る、○

冬日ハ總て木葉なきヲ然り多く木葉なし唯



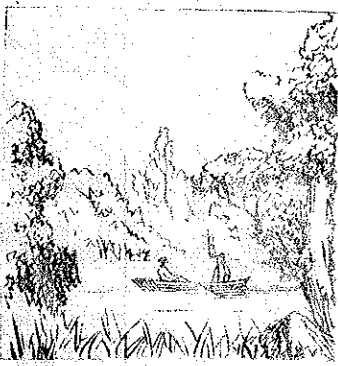
松栢の類のみ、葉あり、○野草ハ冬日亦ても生ずるヲ○否、生ざることをなし、

汝ハ林中ハ鳥あり、又水中ハ魚ありと、思ふや、○必これあらん、唯明不見ることを得ざるのみなり、

林間ハ湛ハとる水上ハ、數多の水鳥ありて、游泳

せり、水鳥ハ、閑静ふるを好むもの也、其浮べる處ハ、景色甚だ濠々なり、

此圖も亦林中の湖なり、これハ



前示したる圖の湖と同トきク。○然リ同  
 なれども、我が見る所ニ因リテ、異スルナリ。  
 今湖上ニ浮べる舟あり、舟中ニ多クの人を載  
 せり、この人の、携へたる、長きものも何なりや、こ  
 れハ、水棹して、舟を動かシ、  
 具ナリ。○此舟ハ、何れの方  
 へ行くや、とまを、左の方ニ  
 行くナリ。

此舟も、前の舟と、同トきク。  
 ○否同トからば、此舟ハ、前

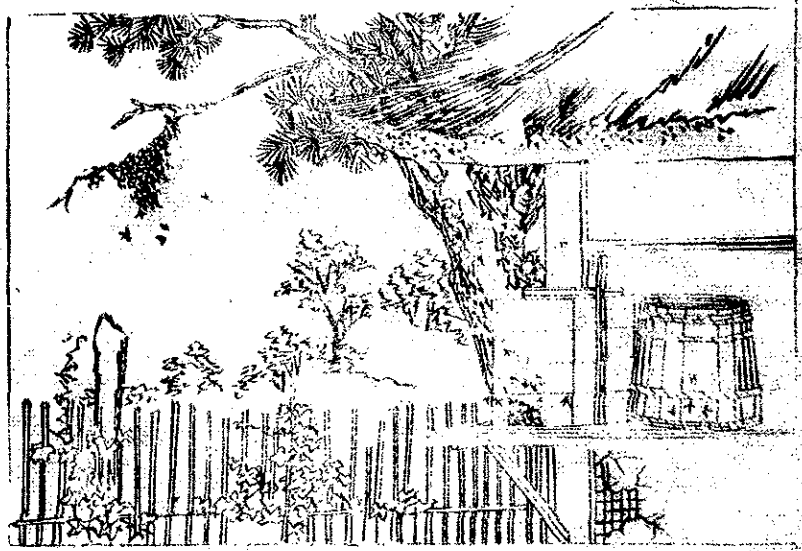


の舟より、大ホして、八人を載せたり、  
 何如ホして、舟を進むるや、○此中六人の携へ  
 る櫂を、操りて、舟を進むるなり、○舟ハ、櫂を操  
 たる人の、何れの方へ、行くそと、いふホ、其後の方  
 へ、行くなり、舟の、櫂し、舳ニ居る人も、何を爲るぞ  
 と、いふよ、先の人の、水前を測り、後の人も、舵を  
 操るなり、

第二

此圖も、蜜蜂なり、蜜蜂の、蜜を巢の中ニ貯ふるを  
 見よ、其勤、實ニ容易ならん、

大地の間へ生を稟けた  
 るものゝ、蟲きらも猶か  
 くの如し、況や、人と生れ  
 ざる者をや、余今汝等よ  
 蜜蜂の、蜜を貯ふる状を  
 語るべし、  
 此蜂も、髮筋の如き舌  
 あり、此舌を、花の中へ入  
 りて、蜜を、吸取りたり、  
 此蜂、夏の際も、旭の昇るを待ちて、巢の中より飛



出種々の花を、尋ねて、其中より、力の及ぶ限りの  
 蜜を、吸取りて、歸り

其際も、何なる暑き日にも、怠らば、日々飛去り  
 て、ハ、飛回し、夏の永き日を、一刻の時間も、徒に費  
 以、ことなく、蜜を、巢の中へ、積置ゆ、冬へ至り  
 て、一種の花無き時にも、食料小乏しきことなし、  
 此蜂よ、ハ、巢毎に、必、秀で、大なる蜂ありて、これ  
 を、蜂の王蜂といふ、又、蜂として、蜜を取らざる、蜂、  
 頭あり、此蜜蜂を、バ、かの能く勤むる蜂ども、これ  
 を、逐出だして、共に、巢の中へ、棲まざる、なり、

汝等も幼時より日々勉め勵んで、此峰に恥ぢざるやう、心かくし、怠惰にして、其業を勉めざることを、此蜜奴の如くならんべし、必世間の人小疎まれて、遂に與ふ交るものもなきに至るべし

第三

人と交るふに、眞實を以てして、決して虚言すべからば、○衆人は對して、親切に交り、言ひ、必忠信を、主しむる時、衆人も亦我を愛して、其身も自幸福を得べし、

汝も虚言の惡しきことを知りや、○然り、虚言

の惡しき事の屢こゑを聞けり、

若し虚言をる時、人皆汝を棄て、顧ざるべし、

此の如くなるるとき、何を以て、身の幸福を得べき、

自其惡しきことを知りて、虚言したる後、汝の心は快きや、○否、快かざれば、

然らば、汝の心は惡しきことを知りたらば、決して、これを犯すべからば、縦令人の見ざる所にて、常々父母、教師の面前と思ひて、其行状を慎むべし、これを獨を慎むといふなり、

故に善良にして、正直なる鬼の神の助を得て、其  
身の幸福を享ふこと、疑無し、

若く又誤りて、窓を破り、書を汚し、戸の鍵を失ひ、机

上は墨を翻せる時おど

く父母教師の前は行き、

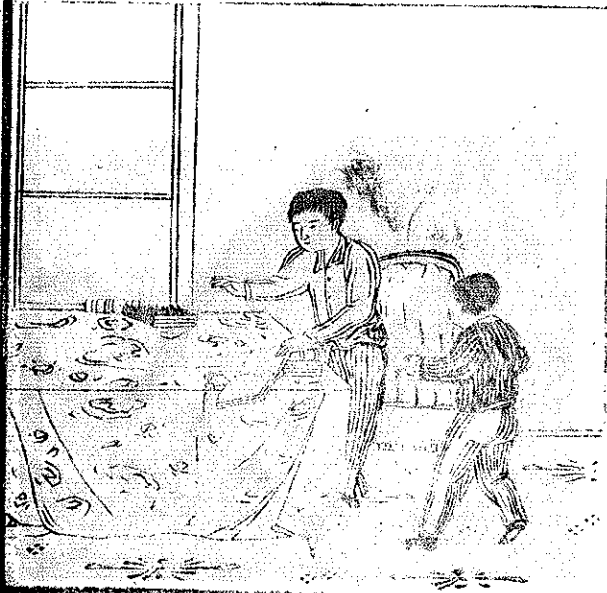
自其始末を訴て、罪を謝

をべし、是唯人を欺る

ざるのみならん、亦自欺

りざるなり、

自欺ハ、ざらんおとを欲



世ハ決して虚言をべからず、只此一事ハ到底善

人と、なるべきの道なり、

人と約して、これ又背くも、不善の甚しきものな

り、必衆人の損辱を、免む得ば、故に一旦約し、

言を、務て正實を行ふべし、苟信を、朋友に失はば、

縦令學術に通じとも、生涯身を立つること、能は

ざるべし、

悪事、小なりといへども、忽ちおすべからば、其

一念、漸長ざるときは、是非を明し、善惡を審み

たること、能ざるに至るものあり、人として、是

非善惡の心無き者あらざれば、常又善は就き、惡  
を去り、是を行ひ、非を排き、虚言せば、約束は背か  
ず、其快からんことを求むべし、心まこと不快き  
を、意を誠みをとといふ、此の如くなるるときは、必衆  
人の敬愛を得て、神の助を蒙り、其身又大なる幸  
福を享るものなり。

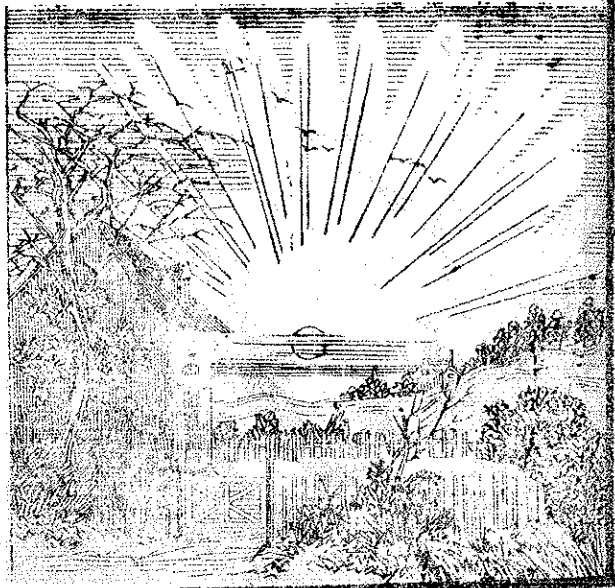
第四

夜將又明けんとする時、雞先鳴く、夜既不明くま  
ば、鳥雀鳴く、  
汝も、寢所不在りて、雀の鳴くを聞きしや、此鳥も

夜明けの後、眠ふこと  
あらば、人として、鳥雀  
も劣るべからず、故に鳥  
の聲を聞くとき、直に  
起き出づべし、

神は晝間人々も、日光を  
與へて、其業をなすも、便

ならしむ、然るに夜明け後まで、猶寢所不在ら  
ば、神の恵を棄るなり、故に汝等、必夜明けぬれば、  
直に起き出で、業を就くべし、これ身を立つる





の初なり、

幼稚のものハ、夙早起きて、勉強し、無益な時を費すことおけよ、その習性となり、壯年の後、業を勉むるも倦怠の心を生ずるよとなり、

夫神も必勤むる人お、たゞざれど、妄に物を與へ以て、勤むまば物を與ふるものなまば、身の勉強ハ、幸福を生む母なりと知るべし、

されば人々、能く勉強して、身の幸福を求むべし、勤むれば、必功あり、惰まらば、必功なし、今日勉むべしとも、明日ありと云ふことなま、今年學ばずとも、

し来年ありとも、ふことなま、れ光陰も久の如し、一度去りく、復還らざ、壯年に至りても、業一事を習ひ得ることもなく、遂に貧窮困苦に陥るも、皆自招くの禍なり、

### 第五

二人の童子あり、其小野に出で、樹陰に息へり、去の地の野草、灌木、茂るを以て、氣候の夏なることを知る、一人は、一卷の書を、開きて、ときを讀み、又一人は、坐して、其文を聴くことを、喜ぶ不似たり、我其聲

を聞かざれども、今其顔色を見つ、其心は喜ぶることを知り、○何よ、りて喜悅の心、顔色は形ある、や、○微しく笑へる、色あるを以て、其喜悅の心あるを、知り、人、口を開かずとも、其笑を、含める、心は喜の、あつを、告ぐる、如く、顔色は、喜怒を、人、不知し、むる、徴なり、



此、喜、怒、哀、樂の情、あつ、如何よ、これ、を、隠さんと、する、顔色、の、徴、を、覆ふ、べからず、され、人、は、對して、不平の、心を、懐く、親切、不遇、も、何と、なれ、心、も、我、心、に、毫も、好、を、なす、又、不平の、心、あつ、必、顔色、の、形、なる、者、なれば、なり、其他、或、不、垂、なる、とき、或、倦、怠、せ、るとき、皆、其、心、を、顔色、の、形、を、以て、人、は、知ら、ざる、こと、なり、

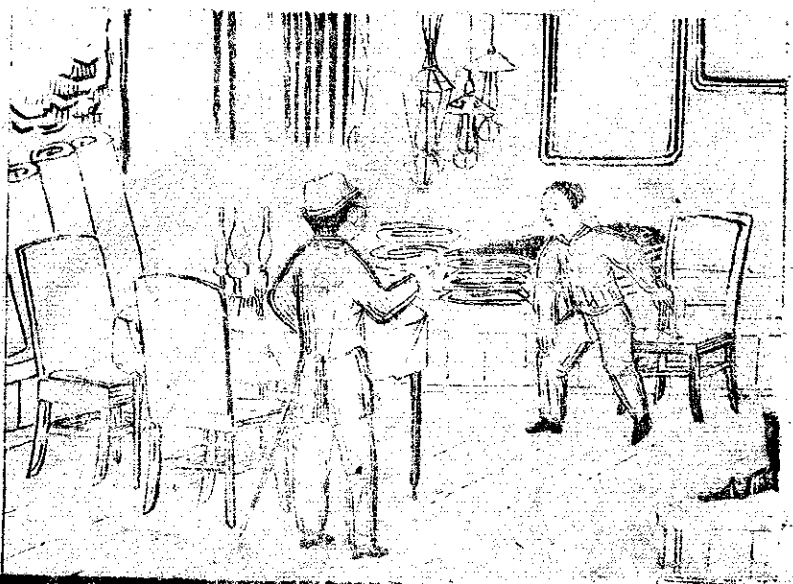
第六

凡世間、ある、人、を、貴き、も、賤き、も、父母、より、生

れざるハナリ故ニ父母ハ我身の出て來ル本を  
まば本を忘るまじきことなり幼てや養育の恩  
山よりも高く海よりも深くして幼き時より晝  
夜艱難苦勞して抱き育くられざるをやまれば  
深く其厚恩を思ひて孝順の心怠るべからず  
子の父母につかへて孝順をるハ神より命トた  
る務なまばこれを忘るべからず苟不孝の行あ  
れば唯一人の憎を受くるのこならん必神の責  
を免まざるものなり  
神也我ニ性命をさづけ又我を守り且幸福を興

ふるものなまども神ニ代りて我を養育せしハ  
父母なりされハ父母ハ神と同じく敬ひ尊び何  
事も逆ふことなきを孝順といふ  
苟父母の命ニ逆ふことあれば神の責を受けて  
禍又罹るより父母の誠を正ガ身の及ばざる  
所を補ひ助くる所として即神明の命なりと  
得決して背くべからん  
昔年一人の男子あり其人とより温順として幼  
稚のときより兩親ニ孝行たかひなきも  
其家固富めるはあらざれども貧き人を憐

み、凡て人又交るふ、信實なるゆゑ、誰いふとなく、此男子を善人と呼なせり、幼き時、近郷の家より、僕たりしが、風ふ起きて、一事一業も怠ることなく、暇あるとき、手習ふ、心を盡し、又好みて、讀書、算術を學び、由を幾たりざるに、利發の人となまり、



主人より、暇を與ふるとき、己の隨意に遊ぶことなく、必我家に歸りて、父母の安否を問ひ、終日膝下は居て、事は従ひ、父母の心を慰むることを勤むせり、  
 主家を出で、後の、瑣細なる商をして、渡世せしが、人々、此男子の、正直なるを知り、其物品を信託けし、幾もなく、稍豊となまり、  
 其後、父を喪ひて、母の老を養ひたるが、晝夜怠なく、介抱して、其心は、違ふことなく、假し、母の厭嫌ふことをなさず、常に善事を好みて、慈愛の心

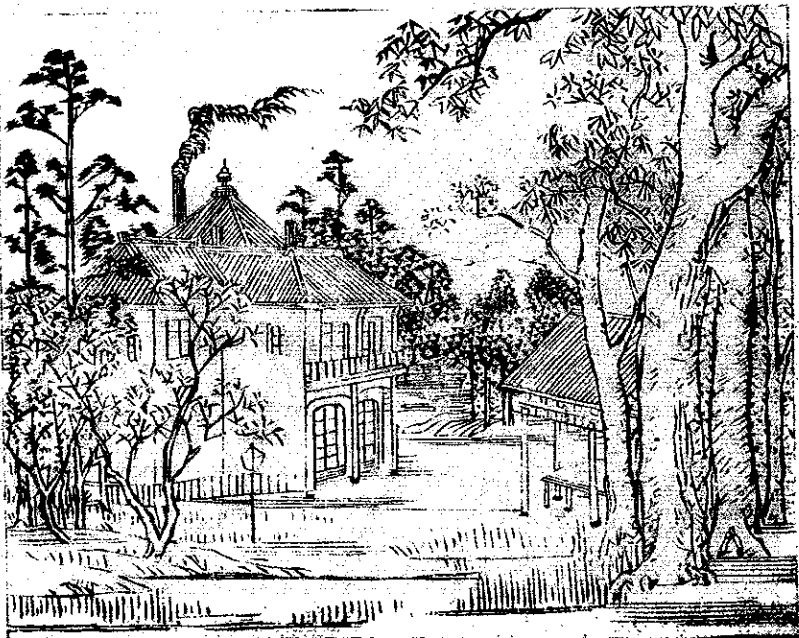
禽獸草木まで及びけまへ、其家次第は繁榮して、  
富有の身となれりどぞ、  
宜ふり孝ハ、萬善の本といへること、此男子は生  
涯の正直慈惠學バザして、此に至る者皆孝よ  
る生じる所なり、

子の父母は仕へて、孝順なるべきハ、天地自然の  
道よりて、須臾も忘るべからば、然まども、外物の  
為る心を奪われて、其道を失ふ者も、少あらざ  
れば、常は其心を守り、自然の道を忘るべからば、  
今日太平の世は生とて、妻子と與は、鼓腹の樂を、  
享くこと何の幸う、これ又知らんや、故又宜  
く、國法を遵守して、各其業を勤むべし、凡人の子  
たるもの、幼時より、親は事ふること、此男子の如  
くせむハ、あるべからば、

第七

此圖せる所ハ、田舎の富家なり、其四面ハ、茂林  
花木ありて、宅前の平地ハ、芝を栽する、好き景  
色の所あり、  
汝ハ、この家の圖を、能く見て、其様を知るべし、  
此屋も、數多の棟は、分まらば、

屋の上より突き出でた  
ると、烟筒なり、これハ、  
煖室爐の、烟を出だす  
ために、設たるなり、  
凡て物を見るときハ、  
何の用たることを考  
へ、又其形を、能く記憶  
せし、物を見るとして  
も、其用を考へず、又記  
憶せざる人ハ、終身事を識  
ることを、能とせざるもの  
なり、



第八



此圖ハ、春日の景色なり、禽鳥と、晴空と、舞ひ、蜂蝶  
と、芳草と、戯まじり、  
木も、嫩芽を生じ、草ハ、新  
葉を發し、看るとして、緑  
ならざるハ、なし、總て天  
生の物也、春又至ると、美  
しき衣裳を着くるが如  
し、

人の少年を、一生中の春時なれば、才能の種子を、  
蒔くときあり、

少年の時も、精神も、充滿し、年數も、未遠けきど、勉  
學びて、生涯の安樂を、冀望しべし、

少年の時も、勉學を怠るものも、一年の春時、種  
子を蒔うざると、同じく、生涯智識を開くことな  
し、

斯る少年等も、縱令富貴の家も、生まるとも、遂に  
必貧窮とならん、

今世上も、富貴ある人と、貧賤なる人とあり、其智

識も、行状も、見れば、富貴なる人も、智識も、開け  
て、行状も、亦正し、とき皆少年のとき、殊く勉學の  
ところものなり、又貧賤なる人も、智識もなく、行状  
も、亦正しからず、これ皆少年のとき、勉學へざら  
ぬなり、

されば人々、幼少のときより、師の教示も、従事し  
て、一身一家を立つることを、學ぶべし、

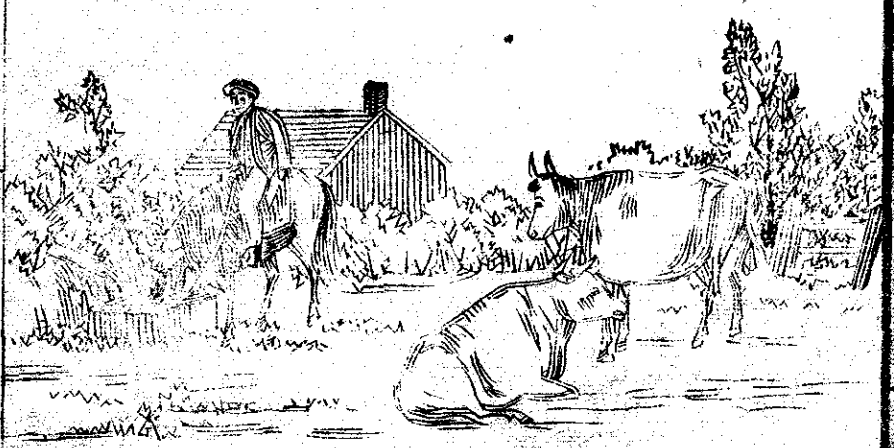
師傳て、父母も替りて、兒童を訓誡し、善道に進む  
ことを、教ふるものにて、我身も善教し、學術とを、  
授けて、我資益をなれよ由り、父母も等しく、尊敬

して、其恩を忘るべからず。

第九

人も、萬物の靈なきは、禽獸蟲魚と異りて、能く  
眞直に立ちて、歩行は、獸も能く物を見、香を嗅ぎ、  
聲を聞き、食を味ふるは、人と同しと雖、其歩行を  
るは、立つこと能はず、又聲を發せざりし言を  
出だして、語ることを得ば、人の能く言を出して、  
て、意中を、語ることを得、又能く諸物を推考して、  
物理を解す、是其異あり所あり、  
そもこの世界へ、全く人の住居する爲は、神の造

りたるものにて、世界  
し、即人の住所なり、  
既に人の爲は、此世界  
を造り、日あり、月あり  
て、物を照らし、また、其  
目を歡とて、むるは、  
地上は、芳草を生じ、梢  
頭は、美花を開き、  
人の食物を須むるも、  
のゆゑに、田野に於て



學書本 卷三

五

六



穀物を與へ山林は於て鳥獸を與へ河海は於て魚類を與ふ  
人を衣服を須むるゆゑ木綿と蠶を生ぜしめ  
或は野獸の背より長き毛を生じて衣裳を製ると  
とを得しむ

人は家屋を造りて諸の器械を須むるゆゑ小地  
中より銅錢などを出たしてこれを作らしむ凡  
て人の関くべからざる物も一として與へざる  
ことなり

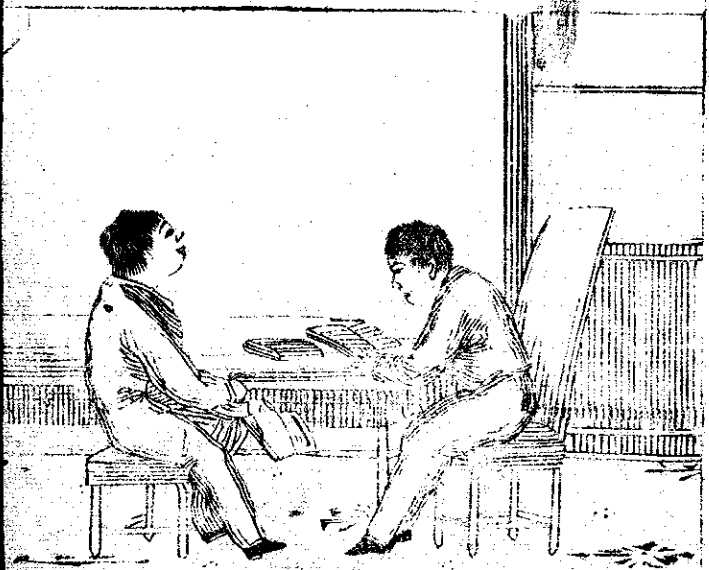
人も好音を好むときハ鳥はこれヲ爲し歌ひ芳

香を好むときハ花はこれヲ爲し薫り晷日ハ雷  
雨あり炎熱これヲ爲し去り寒天ハ霜雪あり  
澆きて以て煖を取るべしこれ皆神の賜ものに  
して所としてこれ有らざるハなし凡此地上及  
河海の萬物も禽獸、蟲、魚、山林、草木の花實も至る  
まで皆人を養ふが爲し神の與へたるものなり  
神既又此諸物を人に與へて足らざるものなり  
らむ故に人々慎みて神の賜りのを受け我身  
の生活を計るべし  
然もとも惡心、惡行の人ハ此賜りのを受くること

し能え依りて生厘、貧窮なれば、其安樂を願えん  
よハ必勉めて、善を行ふべし。

第十

爰は、二人の童子あり、一  
人え、手ふ書を持ちてく  
まを讀めり、此童子も、勉  
強して、能く書を讀むと、  
見えたり、  
其書ハ、久しく用ゐたる  
ものなれども、猶新き物



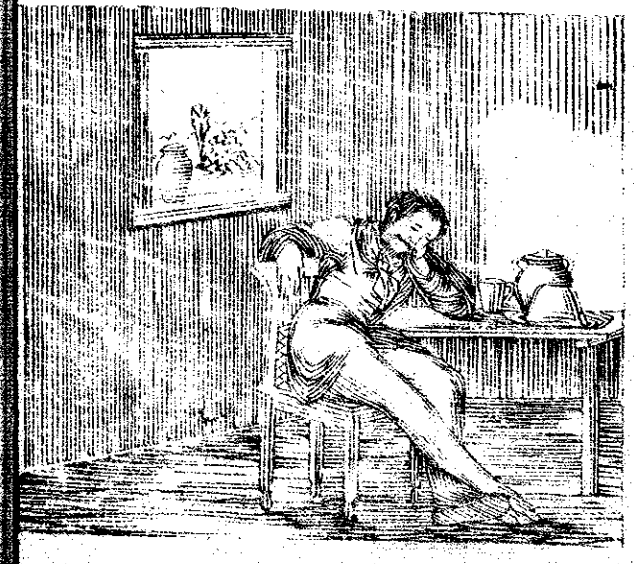
の如し、因りて、此童子も、怠惰ならびて、又書を  
大切なることを、知まじ、  
彼も日々學校不行きて、小學讀本を學び、習ひ得  
たる所の、書を、能く誦讀して、忘るゝことなから  
べし、  
今一人の童子も、怠惰のもの、見えたり、何如  
と、なれど、彼が持ちたる書は、悉く汚し、まじ所々、裂  
け破れ、まじるや、なかり、  
此童子も、勞して、書を讀むと雖、忘れたる處、數箇  
條なれば、通して讀むこと能えり、彼人固く書を好

まざるゆゑ、かく學びたる所を、多く忘るゝなり、  
汝も彼の顔色を見て、書を好まざることを知ま  
りや、彼の顔色の怠惰なるを表せり、彼も善  
良にして、能く書を讀むことを好まば、其顔色、斯  
の如く、見ゆることなり、  
善良なる童子は、斯る顔色して、異にして、必聰敏  
と見ゆるものなり、  
彼も能く心を用ゐざるゆゑ、其書も、破れ汚  
たり、斯る懶惰のもの、遂に困窮卑賤の身成ら  
るべし、尤誠むべきことならずや、

第十一

昔時、一人の怠惰なるものありて、常に職業をな  
さば、今これを次の圖に示せり、  
此もの、幼稚のときより、怠惰なるものにて、物  
事、勉強をることなく、己が職する業を爲すこと  
と能わず、晝は徒ら坐せり、或唯眠るのみ、  
彼壯年に至りても、猶少時の怠惰を改むること  
能えず、故に其家貧にして、衣裳も、帽も、甚古びた  
り

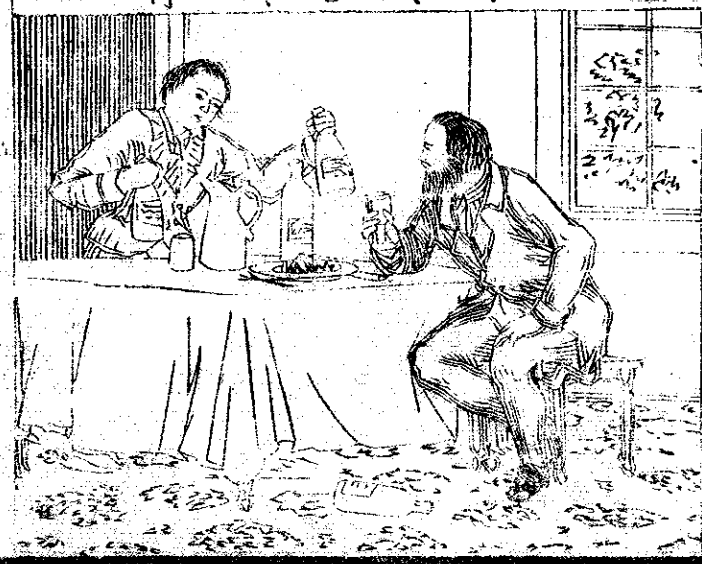
彼も好き衣裳を好まざるよしあらざれども金  
 なくして何如ぞ好き衣裳を買ふことを得ん  
 や又其業を務めずして何如ぞ金を得べけん  
 や  
 彼も家も妻あり○其妻  
 く何如ふる衣裳を著と  
 りと思ふや必破まると  
 衣裳を著とるなるべし  
 彼も時として少しの金  
 を得るとくわりされど



其金を以て衣裳などを買ふことなく即時  
 其金を無益に費せり今その状を次  
 に説示すべし

第十二

此圖は即前の怠惰もの  
 して今日少しの金を得と  
 りされども平生酒を好む  
 の癖あるゆゑ己の家を  
 歸らざりて直に酒店へ行  
 きたり



彼く甚大酒より得たる金の盡るまで酒を  
止むることあり、  
彼十分酒を飲むときハ其心狂亂して暴行を  
なす或ハ路傍に倒れて前後も知らば眠ること  
あり、  
是故に時として少の金を得ることあれども  
飲酒の爲まてこれを失ひて衣裳等を求むること  
を得ば、

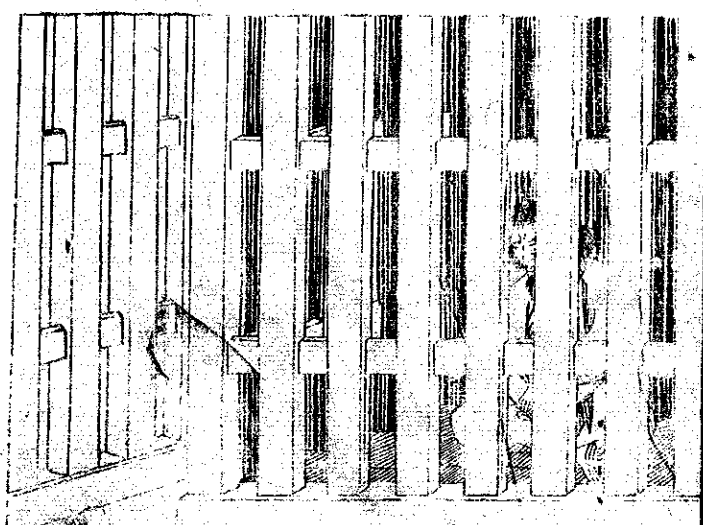
此怠惰に飲酒とも極めて悪事よりこれより  
多くの悪業を生ず凡て人も大飲すまば翌日身  
體勞多く職業をなすこと能はず職業をおき  
まば金を得ることなし金を得ることなきは  
我日用の品も乏しくして萬事不自由なり故に  
或悪しき道よても金を得んことを願ひ辱人を  
欺くま至るものなり○されば平生戒むべきハ  
怠惰と飲酒なり、

第十三

既に前示する怠惰人の飲酒すること益止  
まばして毫も職業をなすことなし稀にも職業  
をなさんと思ふ心の生ずることとあれども幼

少より懶惰は慣とる身中又其身を以我心より  
 従ひてむること能わざりて日々慢遊を事とし  
 一錢をも得ることなし、  
 然もども飲酒の心を止むことを得以何如ま  
 かりて金を得て飲酒せんと思ふ一念増長して  
 終に惡意を生じ夜々近傍の家を忍入り金銀を  
 盜取りて飲酒の料となせり、  
 斯る惡業をなして發露せざることを無けども遂  
 に捕はれて獄中を繋ぎまたり、  
 此人ハ斯く獄中に入りて、葉の上を居るを以て、

今日に至りては、また一  
 滴の酒をも得ること能  
 はずして、只一人暗き處  
 へ坐し絶て心を慰むる  
 ものなり、  
 既に惡事を犯したれば、  
 今更悔悟をといへども、  
 身を救ふの術なくして、  
 終に獄中を死せり、  
 家をも妻も小兒あり其妻を何如にして身を養



小學讀本 卷三 五

ひ又小兒を育つるや、其次第を、次條に説示すべし。

第十四

此獄中、死したる人の妻も、貧乏家より、小兒を育てんとすまども、かねて一錢の貯蓄もなく、又其夫の悪事をなして、獄中、死す程の者なれば、村里の人々、これを憐れ、助くるものなり。此故、妻は、他人の衣裳などを洗ひ、僅に其日の活計をなせども、素より女のこころ、多分の金を得ること、能くば、動もれば、其小兒を餓死す。

あることあるを、如何にも、をべきやうなく、日夜悲歎して、居たり。終つて、其家より、住み難くなりて、小兒を携へ、故郷を、立ち去り、  
そと酒も、能く人を、昏迷せしめ、亦人を、狂亂せしむ。○人の、困難をも、人の、悲歎するも、人の、争論するも、又無益の言を、出だれども、道理なき事を行



ふも、皆酒のなき一むる、悪業なり、

第十五

此圖も、田舎の景色なり、  
いま畠より、穀物を積こ  
たる、車を挽きて歸り、家  
の門よ、入らんとす、  
汝も、此穀物を、何なりと  
思ふや、○こまて、小麥な  
り、此穀物も、日よ乾けり、  
穂を打ち落し、實と、葉と



を別つ、其のち、磨りて、これを挽き、小麥粉と為  
し各家に貯ふ

此小麥粉と、餛飩、索麵等を製する、用ゐるもの  
なり、

麥の種類も、小麥、裸麥、大麥あり、是等と、稻、豆、稗、粟  
等を悉く穀物といふ、穀物も、皆動物の食と為りて、  
身の養となるものなり、

第十六

爰も、一人の男あり、其子兄弟二人を、集めて、種々  
の、珍しき話を聞かしむ、



父曰、予前年、此世界を一週せしとき、數多の國々  
に到り、種々の物を見たり、一度甚しき寒國に到  
るることありしが、三個月の間、日光を見ることな  
く、其間、常々夜なり、此國の住民は、雪又ハ氷を  
以て、家を造り入る、皆其内に住あり、○兄弟曰、斯  
る國も、何處にありや、○父曰、此國は地球の南極  
と北極とみ、近き處にあり、

父曰、予、其國に於て、一の高山を見たり、其頂上ハ、  
甚高くして、甚寒し、頂上にある雪ハ、たえず融く  
ることなく、人もし、此山に登るときハ、其頂上ハ、

達せざる前ハ、凍死す、○兄弟曰、太陽も、何ゆゑハ、  
其雪を融けさせざるや、  
又其處ハ、夏もあらず  
るや、○父曰、其國ハ、夏  
といへども、我國の寒  
中より、尚寒し、又頂上  
より、火を噴き出づる高  
山あり、噴き出づる  
烟ハ、冷も烟筒の、烟の  
ごとし、予、其烟を見し



又我家の烟筒を集めて、一萬以上、至らざれば、かゝる烟を、出でざるべしと思へり、

此父の話甚大なることなれども、決して虚言にあらざり、眞實の話なり、

父又曰、予大海を渡るとき、漁師の捕へたる、鯨を見たり、此鯨も、殊又大なるものなり、長さ、十間餘ありて、體の高さ、三間餘あり、數多の漁師も、鯨の脇腹に、穴を穿ち、腹中に入り、桶を擔ひて、其膏を及み出だせり、

其他、大なる獸類を、數多見たりと云へり、兄弟の

兒は、喜びて、父の話を聽き居たり、

凡て小兒は、謹て、父母の話も、聽くべし、

それ父母の言を、我身は益ありて、智識を増し、道理に適ふものなれば、子とるものも、柔順にして、

其教は、順ふべし、これ身を立つるの基なり、父母を、我を育つ、年も長し、智慧も、優きたれば、

其教は、順ふこととせむとより、不て、親の訓誡を、國の制律と同しく、敬し、畏きて、假らば、これ背くべからず、

第十七

一女兒池上より小舟を浮べとり其舟の帆を只  
一張なり女兒へ此舟を結付けたる長き紐を操  
りこれ舟の遠く流るとも失えざる為なり  
此女兒の浮べたる舟へ一本の櫓あるゆゑよ  
まをスループと云ふ

凡て舟の櫓を帆を帳り風を受けて舟を行くも  
のなり大海に浮ぶる大船も同道理なり又一男  
兒も小舟を持してこれを池上より浮べんとす  
此舟へ二本の櫓ありこれをスクレネルと云ふ  
も一本の櫓あるときほどこれをソツプと云ふ

なり

凡て斯の如き舟を帆前  
船といふ帆を張りて行  
るゆゑなり帆を麻の厚  
き織物にて造るなり  
船中にて人のむをばら  
る處を甲板といふ○船の  
首を艦といひ船の後を  
舳といひ右の舷を右楫といひ左の舷を左楫といふ○船後より突き出でて水中に入りたるもの



を、舵といふ、舵ハ、船の行くべき、方角を、定むるものなり、

第十八

神は、此地球を造り、人民の生活を、為し用ゐる物を、ぞ、皆此地球上に、生ぜしむれば、人々、其道を盡して、これを求むるときハ、何物も、得ざる事となり、然れども、人々の善惡と、勤怠と、因りて、物を得ると、得ざるとあり、且、又人の務に、従ひ、物を得ると、差等あり、  
今、遊戯のみ、耽りて、少くも、心を、他事に、用ゐざる

れど、此地球ハ、徒ら、遊戯の、場所となるのみ、又財を蓄るのみ、勞して、心を、他事に、用ゐざれば、此地球ハ、尺財を、積むの、場所となるのみ、  
もし、風車等の、機關を、設けて、世間を、利あることを計るときハ、この地球ハ、種々の、機關を、設くべき、場所となれり、  
人々、能く、心を用ゐて、世間を、利あることを計るべし、世間を、利ある時ハ、亦、必、我身に、利あるものなり、此の如きときハ、此地球を、生トする、神慮も、合ふといふべし、

今この圖を畫けるは、富人多くの貨幣を出だして、衆人を示す。衆人がこれを見て、大に感づかぬ所あり。蓋此輩ハ斯る多くの貨幣を得たることなきゆゑなり、此富人も嘗て學校に入り、多年の間勉強して、百般の學術を覺え、先き種々の機關を發明し、大に世上に利



益あることを工夫し、今亦其身も大に利を得て斯る富人となりたるなり。富人衆人に告げて曰、夫この地球ハ大活物にして、勉むまば、必其報あらざることを文一人能く勉め、世に益あることを工夫するは、苦勞する時ハ、其報も必大にして、利を得ること多きものなり。骨折まざる業を爲し、或ハ只一身に利あることを勉むまば、其報必小にして、利を得ること亦少し。予も多年の間、刻苦して、纔に利を得たれども、今に至りて、猶無益の時を費やすこと

なく亦無益は財を費やまことなり固自勉て得  
たる貸あれハ皆我有ふしてこれを費やすも隨  
意々々と雖無益は費やすも正道とあらず若美  
服を以て人は驕り又僅の貨幣を得るときは心  
は怠を生ずるハ實は愚にして且不善あり  
貨幣の最要用あるハ衣服食糧を購ひ或これを  
貧人は與へて其饑餓凍餒を救ふあり  
貨幣を得てこれを惜し時ハ世間の用は供へば  
又貧人も與ふることなく又我富を以て他人  
は驕るなどハ愚にして吝なるものあり人も必

これを憎み神も必これを罰せん  
そは貨幣は用ある道は由り善きものとなり又  
惡きものとなる故は道の當否は從ひ利害とも  
又此貸より起るものふり  
故は怠惰にして貧賤なるハ實は恥づべきこと  
なれども貸のみを愛着するも害の根原なり人  
々出精して其業を勉め其富を計るべし既富  
めるに至らばこれを世間の用は供へて貧人を  
救ふを第一とすべし

第十九

平生、斷えず、業を勉むるに、樂しうららば、又斷え、以て、遊戯を、事とするも、樂しからば、故に、就業の時間、又出精して、業を勵み、然る後、出遊する時、その樂を覺ゆるものなり。

就業中、出精せざるべき、其心、恥を懷きて、快し、以て、行の、善良ふるも、心の快きを得る、良法なり、怠惰ふるものも、心の快きことなり、何となんば、其行狀の不善なるゆゑ、恥づる所あり、なり。

一事を成さんとせば、必其心を放つてとなく、

時、これを為べし、或、事業多くして、力不餘ることありとも、怠慢なく、これを勉むれば、必其効ありて、能く成就し、故に、勉むるに、何事も易く、勉めざれば、何事も難し。

書を讀まんとするとき、如何に難き所、又ても、これを止るに、勉強して、得る所ある、又あらざれば、他事を、為こしなけれ、縱令力、餘ら、箇條、又ても、餘念なく、勉強するとき、これを、理會せらる、ものなり。

苦なれば、樂あらば、勉強の後、非ざれば、遊

も、樂あらば、故に書を読む時ハ、其文を理解して、  
後、遊歩をべし、業をふるときハ、其業を成就し  
たる後、休息をべし、然るときハ、心は取づること  
とふきを以て、遊歩も、身の攝生となるものなり、  
抑、恥を人心は於て、感動の大なるものあり、恥を  
知るときは、人々、怠慢、放肆なることなり、平生事  
を行ひ、業を勉むるは、方りて、我心は恥づること  
なからんことを欲するは、身と守るの要務なり、  
今業を勉めて、就らば、書を學ひて、通せざるは、大  
なる恥なり、もしこの恥を知りて、出精勉強する

ことと、業の就らざることなく、書の通せざること  
となり、

人の世は生れ來りて、天工を助けて、國用を資する  
ものなるは、何等の業も、勉めば、國家の益をなさ  
ざるものハ、自禍を招きて、困窮に陥るべし、此等  
は、天は恥ぢ、人は恥ぢ、又我心は恥づること、大に  
神し、妄に幸福を與へば、人を以て、自これを取ら  
しむるものふれば、唯恥を知りて、能く勉強する  
者のみ、幸福を得、恥を知らざるものは、幸福を得



ること能はざるものを知るべし。

第二十

禮と教化の本よりて人民の惡念を止め善心を  
開き人道を離さしめざるものなれば須臾も違  
ふべからざるものなり。  
人性を本善なるを以て辭讓の心を有せざるも  
のたし然まども人欲の私よりて本然の性を  
失ひ遂に放肆避惰のものとなるあり。  
人々幼稚の時より人欲の私を克ちて本然の性  
を復るべし父母より事ふるときハ孝養ふるべく

長上より事ふるときハ恭順なるべし兄弟ハ友愛  
も朋友の信義も親族の協和も皆禮より生ずる  
ものゆゑ又禮を身を立てるの本なりと知るべし。  
貪欲の念を肆はむることなれば忿怒の心を縱  
よするることなりまは貪欲の念よと忿怒の心あら  
とさへ事を行ひ業を務むるは常しく正路を得  
ること能はざるものなり。  
そま貪欲を私情の惑よりて此念を肆はむこと  
きを遂は殘暴の行をなすに至る又忿怒を一種  
の狂疾よりて此心を抑へざるときは遂は争鬪

長上より事ふるときハ恭順なるべし兄弟ハ友愛  
も朋友の信義も親族の協和も皆禮より生ずる  
ものゆゑ又禮を身を立てるの本なりと知るべし。  
貪欲の念を肆はむることなれば忿怒の心を縱  
よするることなりまは貪欲の念よと忿怒の心あら  
とさへ事を行ひ業を務むるは常しく正路を得  
ること能はざるものなり。  
そま貪欲を私情の惑よりて此念を肆はむこと  
きを遂は殘暴の行をなすに至る又忿怒を一種  
の狂疾よりて此心を抑へざるときは遂は争鬪

の端を開くに至る、必竟ハ、皆幼稚のときより、辭讓の心を失ふはよき事、古語曰、謙を益を受く、滿を損を招くといへり、終業を務むるに、心中に、爽快を覺え、今日遊怠ふれば、翌日繁忙の愁あり、古語云、終身道を讓るとも、百歩を枉げば、終身畔を讓るとも、一段を失ふといへり、是禮讓の得ありて、損なきを論ずるものなり、

第二十一

昔一人の童子あり、天性至孝にして、善く其母を

事へ、毫も其命を違ふことなく、母事を命ずる毎日は、直に立ちて、これを行ひ、常に怠らば、母嘗て紡絲を繰りて、絲環を、紆ふことあり、其子に命じて、紡絲を手を掛けしむ、童子も、絲を紆ふるの間、過ちて、これを紛亂し、解けざるゆゑ、急いでこれを解く人とならば、却りて、緒を失へり、童子、既にして、一の緒を求め得ざるゆゑ、頻々これを引けり、益固結して、復解くべからざるに至る、因りて、更に狼狽して、一線を斷せり、母これを止めて曰、汝過ちり、此の如くする時ハ、適は其



給亂を、益そのみ、暫汝が  
 心を静め、思を平よして  
 正き緒を求むべく、既よ  
 正き緒を得まば、亂れよ  
 る絲を、自解くるも、な  
 りと、  
 母又童子よ、告げて曰、夫  
 入世の業を、務むるハ、猶亂まざる絲を、理むるガ  
 如し、是よ、臨み、宜しく、汝の終身を、計るべく、世よ  
 處し、事よ、臨みて、特私欲、忿怒よ、惑ひ、己の血氣を、

我ハ、これバ、縱令苦心焦思して、其力を盡せども、  
 徒々、勞して、功なきのみと、

小學讀本卷之三終

太田秀敬翻刻

東京第四區三小區小石川傳通院前付の五番地

前川善兵衛發兌

大坂府下第天區廿三區島崎公堂寺町四丁目

筑前福岡實了門

林 齊 助

同 博多中島門

船末彌助

筑後久留米米屋門

菊竹儀兵衛

弘通

書肆